

国立国語研究所学術情報リポジトリ

使用実態から見た複合動詞の非用：

『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』に基づく分析

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2024-11-13 キーワード (Ja): 複合動詞, 使用実態, 非用, 中国人学習者, 日本語教育 キーワード (En): 作成者: 丁, 若峰 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0002000364

使用実態から見た複合動詞の非用 — 『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』に基づく分析—

丁 若峰 (総合研究大学院大学日本語言語科学コース) †

Avoidance of Compound Verbs from the Perspective of Usage: Analysis Based on the 'International Corpus of Japanese as a Second Language'

Ruofeng Ding (The Graduate University for Advanced Studies)

要旨

使用頻度の高い複合動詞(「V1」連用形+「V2」)は、日本語教育では習得が必要であるにもかかわらず、学習困難であることが指摘されている。本稿は、複合動詞の習得研究においてしばしば見落とされがちな非用現象に注目する。『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』を持ちいた分析の結果、会話でも作文でも、特定の場面において、中国語を母語とする日本語学習者は全体として対象語複合動詞使用の頻度が日本語母語話者より少なく、代替表現として単純動詞を使う傾向があると検証された。

1. はじめに

複合動詞¹は日本語母語話者(以下、「母語話者」という)に幅広く使用され、単純動詞では表し得ないさまざまな表現を作り出す役割があると指摘されている(森田 1994, 姫野 2018)。

これまで、複合動詞に関する学習者の誤用を考察した研究が多くされてきたのに対し、学習者の非用²に注目する研究は少なく、中国語を母語とする日本語学習者(以下、「CLJ」という)の複合動詞の非用実態や非用が生じる要因はいまだほとんど明らかにされていない。陳(2008: 69)は、「誤用分析の限界を克服するために、これからの複合動詞習得研究では、誤用だけではなく、正用も非用も含めて学習者の言語体系を探るという中間言語研究が必要となる。」と述べている。また、学習者には、より適切な言い方をしたい、いろいろな述べ方をしたいといったニーズが存在すると考えられる。したがって、CLJの複合動詞の非用の実態がまだ明らかになっていない現在の状況で、まず行うべきことはその実態を捉えることであると考えられる。

以上のことを踏まえ、学習者がよりうまく日本語を身につけられるようにするためには、母語話者と学習者双方の複合動詞の使用実態を調査することによって、学習者の非用の実態を解明する必要があると考えられる。本研究では、『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(I-JAS)の調査によって、CLJによる2つの場面における「飛び出す」と「呼び止める」の非用の実態をミクロな視点で解明する。

† gs20243504@ninjal.ac.jp

¹ 本文でいう複合動詞とは、「立ち上がる」「取り上げる」のように、前の動詞(「前項動詞」或いは「V1」)の連用形にもう1つの動詞(「後項動詞」或いは「V2」)が結合したものを指す。

² 非用とは、ある場面で母語話者なら当然使うだろうと思われる表現を、学習者が使えない、あるいは使わない現象。水谷(1984)による定義。

2. 先行研究と本研究の位置づけ

学習者による日本語複合動詞の使用実態研究は、主に複合動詞の習得研究の手法として現在でも盛んに行われている。一方、複合動詞の非用の実態に注目する研究はまだ少ない。しかし、従来の使用実態の研究に複合動詞の非用に関するいくつかの結論や考察が見られる。例えば、マリヤナ (2017) はコーパス調査を行い、「学習者は母語話者よりも複合動詞の使用頻度が低い」という仮説を検証した。また、志賀 (2017: 88) は「日本語母語話者に比べ、中国人学習者は複合動詞の使用ができておらず、学習者のレベルと複合動詞の習得状況は比例する」と指摘している。さらに、高 (2018) は「複合動詞の不使用」を重要な誤用パターンとして扱い、学習者が単純動詞を複合動詞の代わりに使用する現象を考察した。その「不使用」の原因は、「学習者が単純動詞のみの使用で意味が通じてしまう、或いは意味が適切に表現できると認識している」ことだと指摘している。

前述の通り、複合動詞の非用をテーマとして、非用の実態を体系的に考察するものは未だに見られない。そのため、複合動詞の非用の比率や、どのような代替表現がよく見られるか、といった非用の実態を解明する必要があると考えられる。このように、ある複合動詞の非用をミクロな視点で考察することで、その複合動詞の非用の実態を具体的に解明することができると思われる。さらに、1語1語の非用から複合動詞全体の非用を探求することが可能になり、非用の研究に新たな思考と方法を提供できる可能性もある。

3. 調査方法

3.1 使用するコーパス

本研究は『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(I-JAS: International Corpus of Japanese as a Second Language) (以下、I-JAS という) を使用する。I-JAS は、迫田久美子氏とそのチームによって開発された大規模学習者コーパスである。このコーパスでは、12 の異なる言語を母語とする日本語学習者 1000 名、日本語母語話者 50 名、合計 1050 名の話し言葉及び書き言葉を横断的に調査し、データを収集している。その主な特徴として、まず、話し言葉と書き言葉の双方について、外国語を母語とする学習者と比較対象としての日本語母語話者のデータが「同じタスク・同じ量」で収集され、両者の日本語を定量的に比較することができるという点がある。また、学習者には日本語能力テストを実施し、レベル判定が行われている。さらに、全参加者の詳細な背景情報のデータが含まれているため、母語別、習熟度別、タスク別、教室環境別などのデータの比較が可能になる (迫田他 2020)。

3.2 分析対象者

コーパス調査では母語話者と CLJ³ を分析対象とした。具体的には、母語話者 (JJJ) 50 名と、CLJ 266 名、計 316 名の分析を行った。CLJ の内訳は以下の通りである。

表 1 教室環境による内訳

教室環境	話者 ID	人数
海外教室	CCH, CCM, CCS, CCT	200 名
日本国内教室	JJC, JJE	66 名

³ 日本国内自然習得における CLJ は人数が少なく、本研究は量的分析に基づいているため、自然習得の CLJ は対象外とした。

表2 出身地による内訳

出身地	人数
中国大陸	159名
台湾	107名

また, 学習者に対してはJ-CATとSPOTによるレベル判定が行われている。J-CAT (Japanese Computerized Adaptive Test) は日本語能力自動判定テストで, 聴解, 語彙, 文法, 読解の4セクションで日本語能力を測定するものである。SPOT (Simple Performance-Oriented Test) はTTBJ (Tsukuba Test-Battery of Japanese) の1つで, 言語知識と言語運用の両面から日本語能力を測定するものである。(迫田他 2016)

過去のI-JASによる研究では, J-CATの総合スコアに基づき習熟度段階を分類したものが多かったが, 本研究では, より全面的に学習者の習熟度を把握するため, 陳(2023)を参考としてJ-CATとSPOTの両方のスコアに基づいて, 学習者の総合習熟度を計算する。具体的には, J-CATの4技能別スコア(聴解・語彙・文法・読解), J-CAT合計スコアとSPOTのスコア, あわせて6種のスコアで主成分分析を行い, 合成された第1主成分得点を総合習熟度とする。その結果, 第1主成分は, 寄与率が72.55%であり, すべての変数にプラスの負荷量がかかっているため, 6種のテストのスコアをカバーする代表値であると言える。また, 主成分負荷量は, SPOTが0.755, J-CATが合計:0.985, 語彙:0.700, 聴解:0.643, 文法:0.661, 読解:0.609であった。

以上の方法により, 値の区間が[-3.0719, 2.5548]の総合習熟度を得たが, 分析の便宜のために, 全ての総合習熟度に最小値-3.0719を加算することで, 値の区間が[0, 5.6267]の総合習熟度を得た。これを四捨五入し, 以下の表3及び図1のように本研究で使用する総合習熟度を得た。

表3 CLJによる総合習熟度

	人数	MAX	MIN	AVR	SD
総合習熟度	266	5.63	0	3.07	1

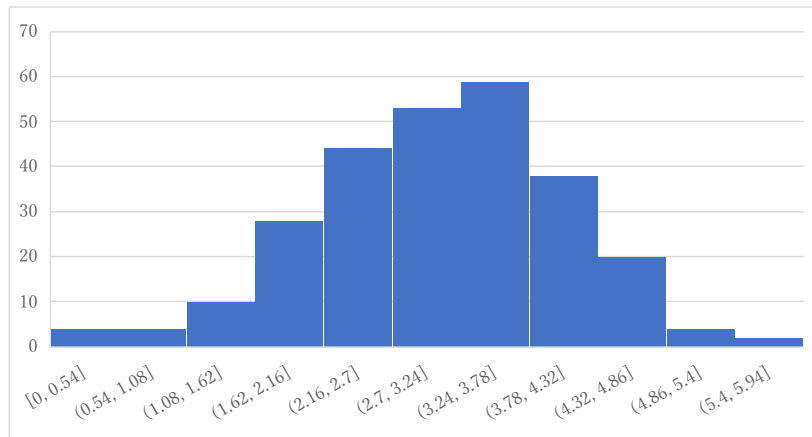


図1 CLJによる総合習熟度のヒストグラム

3.3 分析データと場面

分析用のデータとして、I-JASの複数のタスクのうち、4～5コマ漫画を見て物語を作ったり話す、または書くというストーリーテリングとストーリーライティングタスクを利用した。これらのタスクには図2の2種の漫画が使われている。

対象場面の選択は、まず、複合動詞が使用される傾向がある1コマを単位として対象場面を決定し、場面の名をつける。次に、調査協力者の会話文字化資料と作文から、対象場面の描写であると判断される文を探して抽出する。最後に、抽出された文から対応する述部を探し、辞書形で取り出す。特に対象場面の描写がない場合、【描写なし】と集計する。また、対象場面の描写はあるものの、述部が省略されている場合、【省略】と集計する。

非用になる可能性がある対象場面の抽出について、「ピクニック」タスクにおけるコマ④の犬が飛び出してくる場面において、「飛び出す」が使われる傾向があり、その犬の動作の描写を避けにくいため、このコマ④を対象場面として抽出した。そして、この場面についてストーリーテリングでは「ST1 場面」、ストーリーライティングでは「SW1 場面」と呼ぶことにする。また、「鍵」タスクにおけるコマ③の警官に呼び止められる場面において、「呼び止める」が使われる傾向が一定程度存在し、その警官の行為に関する描写が必要であるため、このコマ③を対象場面として抽出した。そして、これを同様に「ST2 場面」、「SW2 場面」と呼ぶことにする。

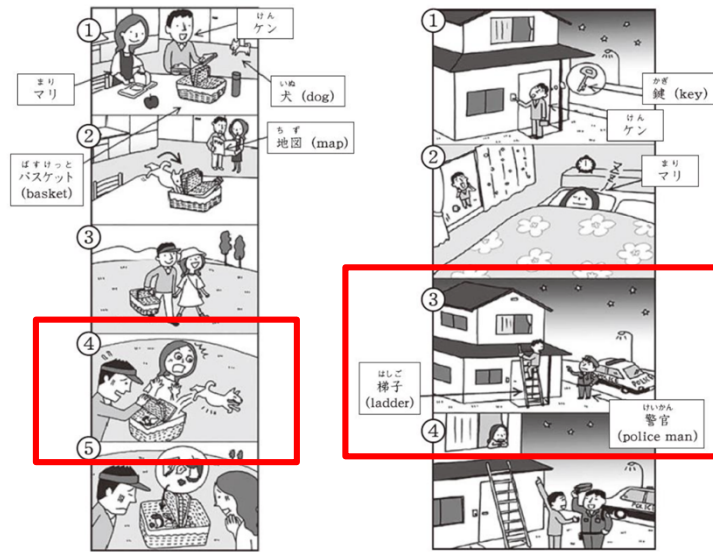


図2 「ピクニック」タスク (左) と「鍵」タスク (右)

3.4 分析手順と分析方法

まず、3.3の手法で4つの対象場面からそれぞれに対応する述部を抽出し、集計する。次に、「ST1 場面」と「SW1 場面」における「飛び出す」、及び「ST2 場面」と「SW2 場面」における「呼び止める」の非用の実態を分析する。

具体的な分析方法としては、まず、記述統計分析を使用し、対象場面における対象語及びその他の表現の使用状況について総合的に概観する。また、母語話者と CLJ が産出した例を示すことで、同じ場面における母語話者と CLJ によるその他の表現の使用実態を比較する。最後に、カイ 2 乗検定を行い CLJ の母集団による対象語の非用の傾向を分析する。つまり、カイ 2 乗検定による有意な関連があれば、非用になっている可能性がある判断する。また、非用の程度を推測するため、クラメールの連関係数 (以下、Cramer の V という) の大きさを基準とする。本研究で扱う基準は、以下の通りである。

- ① Cramer の $V < 0.1$ → 非用になっている可能性が低い
- ② $0.1 \leq \text{Cramer の } V < 0.3$ → 非用になっている傾向がある
- ③ $0.3 \leq \text{Cramer の } V$ → 非用になっている可能性が高い

さらに、「非用の有無」を目的変数とし、習熟度、出身地、教室環境を説明変数とするロジスティック回帰分析 (Logistic Regression Analysis) を行う。ロジスティック回帰分析は医学での疾病の発生確率やマーケティングでの購買確率の予測など、多岐にわたる分野で応用されている。この手法は、特に二値の結果を持つ従属変数の場合に最適であると考えられるため、非用の研究に適切な手法であると考えられる。

本研究におけるロジスティック重回帰モデルと各変数への値の割り当ては、以下の通りである。

$$\log\left[\frac{p}{1-p}\right] \text{ (非用の有無)} = a_1[\text{習熟度}] + a_2[\text{出身地}] + a_3[\text{教室環境}] + b$$

$\log\left[\frac{p}{1-p}\right]$: 目的語使用=1, 代替表現使用=0

[習熟度]: 主成分分析による結果 (連続値)
 [出身地]: 台湾出身=1, 中国大陸出身=0
 [教室環境]: 日本国内教室=1, 海外教室=0
 b: 定数

コーパス研究では, 統計解析ソフトウェア IBM SPSS Statistics 26.0 と表計算ソフトウェア Microsoft Excel 16.80 を使用する。

4. 「飛び出す」の非用の実態

4.1 ST1 場面

4.1.1 ST1 場面における母語話者及び CLJ の使用表現

表 4 と表 5 に ST1 場面の母語話者と CLJ の述部の使用表現を示す。

表 4 ST1 場面における母語話者の使用表現の内訳 (N=50 名)

使用表現	使用人数	割合
飛び出す	27	54.0%
出る	20	40.0%
【描写なし】	3	6.0%

表 5 ST1 場面における CLJ の使用表現の内訳 (N=266 名)

使用表現	使用人数	割合	使用表現	使用人数	割合	使用表現	使用人数	割合
飛び出す	66	24.8%	走り出す	2	0.8%	ジャンプ	1	0.4%
出る	57	21.4%	いる	2	0.8%	現れる	1	0.4%
飛ぶ	56	21.1%	飛び込む	2	0.8%	出現	1	0.4%
【描写なし】	41	15.4%	嬉しい	1	0.4%	飛び上がる	1	0.4%
出す	9	3.4%	ある	1	0.4%	出掛ける	1	0.4%
逃げる	9	3.4%	飛び出る	1	0.4%	逃亡	1	0.4%
走る	7	2.6%	飛び越える	1	0.4%			
来る	4	1.5%	跳ねる	1	0.4%			

まず, ST1 場面における両者の使用表現を概観する。

母語話者に関しては, 全体として使用状況が集中している。【描写なし】の 3 人を除いて, 全母語話者が「飛び出す」と「出る」の 2 つの動詞のみを使用している。その中で「飛び出す」の割合は 54% であり, 「出る」は 40% である。CLJ に関しては, 【描写なし】を除き, 21 種の表現の使用が見られた。よって, 母語話者に比べ, CLJ は ST1 場面でのバリエーションが非常に豊富であると言える。その中で「飛び出す」の使用率は 24.8% で, 母語話者の約半分である。したがって, I-JAS のサンプルから推測すると, ST1 場面においては「飛び出す」の非用が存在すると考えられる。

また, 【描写なし】について母語話者では 3 人が【描写なし】に分類された。(1) の例を見ると, 【描写なし】となった母語話者は犬の様子ではなく, 食べられた食物に焦点を置いていることがわかる。

(1) お昼ご飯を食べようと, えーバスケットを開けた (あけた) ところ, 犬が, えーサンドイッチ, を, 全部, 食べてしまいました

(JJJ48-ST1-00060-K)

一方、CLJの【描写なし】の数は41件にものぼり、15.4%を占めている。母語話者と同様に食べられた食物を描写している場合もあるが、多くのCLJは主人公を主語として、主人公が犬を見つけることなどを描写している。これにより、CLJは犬の移動を描写するのではなく、主人公が犬を見つけることを描写している場合があると推測できる。

(2) そして二人が、ピクニックの目的地に着いたら、犬が、お弁当の、お弁当を全部、食べ切れたの、発見しました

(CCT07-ST1-00060-K)

次に、ST1場面において、母語話者には使用されず、CLJに多く使用された代替表現の上位3語である「飛ぶ」、「出す」、「逃げる」を分析する。

1) 「飛ぶ」

「飛ぶ」の使用率は3位であった。「飛び出す」を上手く使用できず、代わりに「飛ぶ」を使用しているCLJが存在する可能性が高いと言える。つまり、この動作のイメージには気づいているが、より自然な表現を使うことができないCLJが存在すると考えられる。

(3) あー、でもー、その(連体詞)時、あー犬は、犬はーテーブルに、飛びました

(CCM39-ST1-00100-K)

2) 「出す」

「出す」の使用率は3.4%で、相対的に低いと言える。使用例から見ると、「出す」が現れた例のほとんどは「出す」と「出る」の正しい区別ができておらず、誤用として現れたものと思われる。

(4) 犬は、〈んー〉その(連体詞)バスケットー、なの中に〈うん〉、入り(はいり)、出しました。

(CCH33-ST1-00090-K)

3) 「逃げる」

「逃げる」の使用率は「出す」と同率で3.4%であった。

(5) でー、そして、その(連体詞)時あの(連体詞)犬が、急に、ん、バスケットから、ん、逃げました

(CCT56-ST1-00090-K)

さらに、対象語「飛び出す」以外の複合動詞がある程度CLJに使用されていることは、ST1場面の1つの特徴として見られる。

表6 CLJによる非対象複合動詞の使用の内訳 (N=266名)

使用表現	出現数	割合 (全体)	使用表現	出現数	割合 (全体)
走り出す	2	0.8%	飛び越える	1	0.4%
飛び込む	2	0.8%	飛び上がる	1	0.4%
飛び出る	1	0.4%	出掛ける	1	0.4%

表6に示されたように、「飛び出す」以外の複合動詞がある程度使われており、特に前項が「飛び」のものが多く見られる。(6)の例を見ると、一部のCLJは既習の複合動詞を上手く理解できておらず、正確に使用できなかったものと考えられる。

(6) あーん、あー、バスケットー、あけ、開ける時、犬は一、バスケット、の中から、あー飛び込んで、あ、飛び込んでいました

(CCH15-ST1-00090-K)

また、(7)の例を見ると、一部のCLJは「飛び出す」をすでに勉強し、使用する意識は持っているものの、正しい産出まではできなかった可能性があると考えられる。

(7) えと、二人は手をつな、つなが、つなげて、ピクニックをし、している時に、犬は、そ、犬は突然、突然にバスケットから、あー、飛びまし、飛びました飛びました

(CCH17-ST1-00060-K)

4.1.2 ST1 場面における「飛び出す」の非用

ST1 場面における描写の内訳は表7の通りであるが、本研究においては【描写なし】も非用として捉えているため、「飛び出す」を使った者とそれ以外の表現を使った者、つまり、対象語と非対象語に分けて集計し直した。そして、ST1 場面におけるCLJの「飛び出す」の非用を推測するため、カイ2乗検定を行った。結果は表8と表9の通りである。

表7 ST1 場面の描写の内訳

	「飛び出す」	他の表現	【描写なし】
CLJ (N=266)	66 (24.8%)	159 (59.8%)	41 (15.4%)
母語話者 (N=50)	27 (54.0%)	20 (40.0%)	3 (6.0%)

表8 対象語/非対象語別結果

		対象語	非対象語	合計
語者	CLJ	66 (78.3)	200 (187.7)	266 (266.0)
	母語話者	27 (14.7)	23 (35.3)	50 (50.0)
合計		93 (93.0)	223 (223.0)	316 (316.0)

() 内は期待度数

表9 カイ2乗検定による残差分析の結果

	対象語	非対象語
CLJ	-4.2**	4.2**
母語話者	4.2**	-4.2**

**p<.01

カイ2乗検定を行った結果、ST1場面における対象語の使用は、母語話者とCLJで有意な差があることがわかった ($\chi^2(1) = 17.27, p < .01, V = .234$)。そこで、残差分析を行ったところ、母集団においても母語話者は対象語を使用する者が多く、CLJは非対象語を使用する者が多いことが明らかになった。また、クラメールの連関係数は0.234となり、中の関連性と言える。従って、ST1場面において、CLJ全体に「飛び出す」の非用が起きる傾向があると思われる。

さらに、非用の有無を目的変数とし、習熟度、出身地、教室環境を説明変数としたロジスティック回帰分析を行った。まず、表10により、HosmerとLemeshow検定のp値が0.662 ($p > .05$)であるため、モデルのデータへの適合度は統計的に良好であると解釈できる。

次に、表11の通り、習熟度へのオッズ比が0.504 ($p < .01$)と1を下回り有意差が示された。すなわち、ST1場面において、CLJの習熟度が上がるにつれ、「飛び出す」の非用が顕著に低下していることがわかった。また、出身地へのオッズ比が1.987 ($p < .05$)と1を上回り、有意差が示された。つまり、会話の場合、台湾CLJの非用率は、中国大陸CLJの2倍弱になる傾向があると考えられる。教室環境については有意差が出なかったため、教室環境が「飛び出す」の非用に与える影響は見られなかった。

表10 HosmerとLemeshowの検定

カイ2乗	自由度	P
5.872	8	0.662

表11 ロジスティック回帰分析の結果

	B	p	Exp (B)	95%信頼区間下限	95%信頼区間上限
習熟度	-0.685	0.000	0.504	0.344	0.739
出身地	0.686	0.039	1.987	1.034	3.816
教室環境	0.286	0.504	1.331	0.575	3.079
定数	2.971	0.000	19.502		

4.2 SW1場面

4.2.1 SW1場面における母語話者及びCLJの使用表現

表12と表13にSW1場面の母語話者とCLJの述部の使用表現を示す。

表12 SW1場面における母語話者の使用の内訳 (N=50名)

使用表現	使用人数	割合
飛び出す	42	84.0%
出る	5	10.0%
【省略】	2	4.0%
【描写なし】	1	2.0%

表 13 SW1 場面における CLJ の使用の内訳 (N=266 名)

使用表現	使用人数	割合	使用表現	使用人数	割合	使用表現	使用人数	割合
飛び出す	98	36.8%	現れる	2	0.8%	出掛ける	1	0.4%
出る	62	23.3%	いる	2	0.8%	走り出す	1	0.4%
飛ぶ	45	16.9%	出す	2	0.8%	跳ね上がる	1	0.4%
【描写なし】	27	10.1%	飛び上がる	1	0.4%	逃げ出す	1	0.4%
逃げる	13	4.8%	踊る	1	0.4%	飛び込む	1	0.4%
走る	6	2.3%	飛び降りる	1	0.4%	跳び飛ぶ	1	0.4%

まず、SW1 場面における両者の使用表現を概観する。

母語話者に関しては、ST1 場面と同じく、全体として使用状況が集中している。【描写なし】の1人と述部を省略した2人を除き、全母語話者が「飛び出す」と「出る」の2つの動詞のみを使用している。その中で「飛び出す」の割合は84.0%であり、「出る」は10.0%である。ST1 場面より「飛び出す」の使用率が大幅に上昇したと言える。

CLJに関しては、【描写なし】を除き、17種の表現の使用が見られた。よって、ST1 場面と同様に、CLJはSW1 場面でのバリエーションも豊富であると言える。その中で「飛び出す」の使用率は36.8%であり、母語話者の半分未満である。したがって、I-JASのサンプルから推測すると、SW1 場面においては「飛び出す」の非用が存在すると思われる。

母語話者では1例(2%)のみが【描写なし】に分類された一方、CLJの【描写なし】の数は27件(10.1%)である。「食物が食べられた」のように違う内容を述べている場合もあるが、「犬を発見した」のような主人公の視点から述べている例も多く見られる。

次に、SW1 場面において、母語話者には使用されず、CLJに多く使用された代替表現の上位3語である「飛ぶ」、「逃げる」、「走る」を分析する。

1) 「飛ぶ」

「飛ぶ」の使用率は16.9%である。ST1と同様に、「飛ぶ」は「飛び出す」の代替表現として使われている可能性が高い。

(8) 二人はお腹がすいたときにバスケット中の食べ物を食べたいけど、突然中に犬ちゃん飛びました。

(CCT29-SW1-00050-K)

2) 「逃げる」

「逃げる」の使用は13件であり、4.8%を占めている。

(9) 突然、犬はバスケットから逃げてしまいました。

(CCS57-SW1-00050-K)

3) 「走る」

「走る」の使用率は2.3%であり、相対的に低いと言える。(10)を見ると、CLJによる「走る」の用法は「逃げる」に近く、逃走のニュアンスで使用されているものと推測される。

(10) この時、あのサンドイッチを食べた犬は彼らの側に走りました

(CCH56-SW1-00100-K)

また、ST1 場面と同じく、対象語「飛び出す」以外の複合動詞がある程度 CLJ に使用されていることも 1 つの特徴であると見られる。

表 14 CLJ による非対象語複合動詞の使用の内訳 (N=266 名)

使用表現	出現数	割合	使用表現	出現数	割合	使用表現	出現数	割合
飛び上がる	1	0.4%	走り出す	1	0.4%	飛び込む	1	0.4%
飛び下りる	1	0.4%	跳ね上がる	1	0.4%			
出掛ける	1	0.4%	逃げ出す	1	0.4%			

表 14 に示したように、「飛び出す」以外の複合動詞もある程度使われているが、前件が「飛び」のものに限らず多種の複合動詞が使用されている。また、同じ被調査者と同じタスクであるのにも関わらず、ST1 場面と SW1 場面 で使われた複合動詞の内訳は異なっている。

4.2.2 SW1 場面における「飛び出す」の非用

SW1 場面における描写の内訳は表 15 のとおりであるが、述部が省略されている場合はそれらの表現が対象語であるかどうかを確認できないため、【省略】とされたデータは標本から除外した。また、4.1.1 と同じ理由で「飛び出す」、つまり対象語と非対象語に分けて集計し直した。そして、SW1 場面における CLJ の「飛び出す」の非用を推測するため、カイ 2 乗検定を行った。結果は表 16 と表 17 の通りである。

表 15 SW1 場面の描写の内訳

	「飛び出す」	他の表現	【描写なし】	【省略】
CLJ (N=266)	98 (36.8%)	141 (53.0%)	27 (10.2%)	0 (0%)
母語話者 (N=50)	42 (84.0%)	5 (10.0%)	1 (2.0%)	2 (4.0%)

表 16 対象語/非対象語別結果

		対象語	非対象語	合計
語者	CLJ	98 (118.6)	168 (147.4)	266 (266.0)
	母語話者	42 (21.4)	6 (26.6)	48 (48.0)
合計		140 (140.0)	174 (174.0)	314 (314.0)

() 内は期待度数

表 17 カイ 2 乗検定による残差分析の結果

	対象語	非対象語
CLJ	-6.5**	6.5**
母語話者	6.5**	-6.5**

**p<.01

カイ 2 乗検定を行った結果、SW1 場面における対象語の使用は、母語話者と CLJ では有意な違いがあることがわかった ($\chi^2(1) = 42.24, p < .01, V = .367$)。そこで残差分析を行ったところ、母集団においても母語話者は対象語を使用する者が多く、CLJ は非対象語を使用する者が多いことが明らかになった。また、クラメールの連関係数は 0.367 となり、高の関連性と言える。従って、SW1 場面においては、CLJ 全体に「飛び出す」の非用が起きる傾向が高いと思われる。

さらに、非用の有無を目的変数とし、習熟度、出身地、教室環境を説明変数としたロジスティック回帰分析を行った。まず、表 18 により、Hosmer と Lemeshow 検定の p 値が 0.611 ($p > .05$) であるため、モデルのデータへの適合度は統計的に良好であると解釈できる。

次に、表 19 の通り、習熟度へのオッズ比が 0.357 ($p < .01$) と 1 を下回り、有意差が示された。すなわち、ST1 場面と同様に、SW1 場面においても CLJ の習熟度が上がるにつれ、「飛び出す」の非用率が顕著に低下していることがわかった。また、出身地へのオッズ比が 2.706 ($p < .01$) と 1 を上回り有意差が示された。つまり、作文の場合、台湾 CLJ の非用率は、中国大陸 CLJ の 2.7 倍になる傾向があると考えられる。さらに、教室環境については有意差が出なかったため、教室環境が「飛び出す」の非用に与える影響は見られなかった。

表 18 Hosmer と Lemeshow の検定

カイ 2 乗	自由度	p
6.324	8	0.611

表 19 ロジスティック回帰分析の結果

	B	p	Exp (B)	95%信頼区間下限	95%信頼区間上限
習熟度	-1.031	0.000	0.357	0.241	0.528
出身地	0.996	0.002	2.706	1.437	5.097
教室環境	0.715	0.078	2.044	0.924	4.523
定数	3.268	0.000	26.254		

5. 「呼び止める」の非用の実態

5.1 ST2 場面

5.1.1 ST2 場面における母語話者及び CLJ の使用表現

表 20 と表 21 に ST2 場面の母語話者と CLJ の述部の使用表現を示す。

表 20 ST2 場面における母語話者の使用の内訳 (N=50 名)

使用表現	使用人数	割合	使用表現	使用人数	割合	使用表現	使用人数	割合
【描写なし】	10	20.0%	答める	2	4.0%	話す	1	2.0%
呼び止める	10	20.0%	【直接発話】	2	4.0%	掛ける	1	2.0%
注意	9	18.0%	尋ねる	2	4.0%	問う	1	2.0%
職務質問	6	12.0%	見答める	1	2.0%	聞く	1	2.0%
言う	3	6.0%	止める	1	2.0%			

表 21 ST2 場面における CLJ の使用の内訳 (N=266 名)

使用表現	使用人数	割合	使用表現	使用人数	割合	使用表現	使用人数	割合
【描写なし】	131	49.2%	禁止	2	0.8%	相談	1	0.4%
叱る	23	8.6%	掛ける	2	0.8%	呼び止める	1	0.4%
聞く	21	7.9%	怒る	2	0.8%	話す	1	0.4%
言う	17	6.4%	警告	2	0.8%	手伝う	1	0.4%
呼ぶ	15	5.6%	扱う	1	0.4%	叫ぶ	1	0.4%
注意	10	3.8%	止まる	1	0.4%	説教	1	0.4%
【直接発話】 ⁴	8	3.0%	止める (やめる)	1	0.4%	制止	1	0.4%
止める (とめる)	5	1.9%	尋ねる	1	0.4%	出す	1	0.4%
捕まる	4	1.5%	呼び掛ける	1	0.4%	ストップ	1	0.4%
逮捕	4	1.5%	指摘	1	0.4%	問い掛ける	1	0.4%
質問	2	0.8%	留める	1	0.4%	連れる	1	0.4%

まず、ST2 場面における両者の使用表現を概観する。

ST1 場面と SW1 場面の使用状況と違い、まず、母語話者の使用表現は主に【描写なし】、「呼び止める」、「注意」、「職務質問」の4つに集中している。そのうち、最も多く使用されているのは【描写なし】と対象語の「呼び止める」である。それぞれの使用者数は10人であり、20%を占めている。その4つ以外にも10種類の表現が存在する。よって、母語話者はST2 場面の描写に非常に豊富なバリエーションを持っていると見られる。

また、CLJの使用表現は合計で33種類あり、そのうち、【描写なし】となったCLJは131人で、全体の49.2%、すなわちほぼ半数を占めている。また、「叱る」、「聞く」、「言う」、「呼ぶ」、「注意」と【直接発話】がある程度使用されているが、それ以外の表現を使ったCLJはわずかである。そして、対象語の「呼び止める」の使用例はたった1例である。したがって、I-JASのサンプルから推測すると、ほぼ全てのCLJが「呼び止める」を使用することができず、ST2 場面において「呼び止める」の非用が存在すると考えられる。

次に、ST2 場面における「呼び止める」の非用の実態を解明するため、母語話者には使用されず、CLJに多く使用された代替表現の上位3語の「叱る」、「呼ぶ」、「止める (とめる)」を分析する。

1) 「叱る」

【描写なし】を除くと、「叱る」が最も多く使用された表現で、その使用率は8.6%である。この点から、(11)のようなCLJは警官の表情などに着目し「怒っている警官」と認識している可能性が窺える。

(11) えー、それで、ケンは一梯子で、中に入る、として、しようとした(入ろうとした)時、警官が、ケン、警官が、来てー、ケン、ケンを叱りました

⁴ 伝達動詞がなく直接引用、つまり発話内容のみ描写する使用例は【直接発話】として集計した。

(CCT26-ST2-00050-K)

2) 「呼ぶ」

「呼ぶ」の使用率は 5.6%であり、相対的に低いと言える。主に (12) のようなものである。

(12) その (連体詞) 時, ちゃんと, け, あー警官が, えー通しますぐ, 通しましたが, えーけいけん (警官) さんに, 呼ばれた

(CCH39-ST2-00050-K)

3) 「止める (とめる)」

「止める (とめる)」を使った例はわずか 5 件であり, (13) のようにその焦点は男性の動作が停止することに当たっている。

(13) 仕方なく, 彼は, 梯子を使って, あー, あー, 二階の部屋に, のぼりょう (上ろう) としてい, いました (していました) が, あー警察は, 偶然に, とどりかかって (通りかかって), 彼の, 動作を, 止めた

(CCH37-ST2-00080-K)

さらに, ST1 場面及び SW1 場面と違って, 漢語動詞がある程度 CLJ に使用されているということは, ST2 場面の 1 つの特徴として見る事ができる。

表 22 CLJ による漢語動詞の使用の内訳 (N=266 名)

使用表現	出現数	割合	使用表現	出現数	割合	使用表現	出現数	割合
注意	10	3.8%	禁止	2	0.8%	相談	1	0.4%
逮捕	4	1.5%	警告	2	0.8%	説教	1	0.4%
質問	2	0.8%	指摘	1	0.4%	制止	1	0.4%

使用例 (14), (15) から見て, ほとんどの場合において漢語動詞は「叱る」と「呼び止める」などの代替表現として使われているようである。これは, CLJ は既習の表現でその場面を描写することができず, その代わりに母語の強みを活かし, 漢語動詞を用いて描写を完成させるストラテジーを取っているものと推測される。

(14) そして, 彼は, ははしこー (梯子) を一はこび, はこ, びできて (運んできて), 警官一が, あ, 警官が見て, 警告しました

(CCM33-ST2-00050-K)

(15) あーでもその (連体詞) 時, けい, けいさ, 警官が一ん一, か, れを警官が彼を見つけて, ん一, そして, あーえーと, 警官一, が制止えー彼, を, 制止します

(CCH18-ST2-00080-K)

5.1.2 ST2 場面における「呼び止める」の非用

CLJによる「呼び止める」の使用頻度が1であるため、実証分析のデータ要件を満たしておらず、ST2 場面に対するカイ2乗検定及びロジスティック回帰分析は行えない。よって、それらは使わずに考察する。

ST2 場面における「呼び止める」の使用状況を見ると、ST2 場面における「呼び止める」の非用が存在すると推測できる。そして、以下の要因からその非用は習熟度、教室環境、出身地とは関係なく、CLJ全員に存在していると思われる。要因としてはまず、CLJが使用している一般的な教科書に「呼び止める」という語彙が収録されておらず、一般的な日本語授業でも「呼び止める」は取り上げられていないことであると考えられる。つまり、ほとんど全てのCLJが「呼び止める」を習っていないということが主な原因であると思われる。もう1つの要因は、その場面で母語話者も使用する代替表現が多く存在することである。さらに、このタスクではST2 場面を描写しなくとも、物語をある程度説明することが可能であることも一因であると考えられる。

5.2 SW2 場面

5.2.1 SW2 場面における母語話者及びCLJの使用表現

表23と表24にSW2場面の母語話者とCLJの述部の使用表現を示す。

表23 SW2 場面における母語話者の使用の内訳 (N=50名)

使用表現	使用人数	割合	使用表現	使用人数	割合	使用表現	使用人数	割合
【描写なし】	13	26.0%	【直接発話】	4	8.0%	怒る	1	2.0%
呼び止める	13	26.0%	掛ける	3	6.0%	咎める	1	2.0%
注意	6	12.0%	見咎める	2	4.0%	尋問	1	2.0%
職務質問	5	10.0%	尋ねる	1	2.0%			

表24 SW2 場面におけるCLJの使用の内訳 (N=266名)

使用表現	使用人数	割合	使用表現	使用人数	割合	使用表現	使用人数	割合
【描写なし】	117	44.0%	掛ける	4	1.5%	尋ねる	1	0.4%
聞く	24	9.0%	扱う	4	1.5%	問う	1	0.4%
叱る	17	6.4%	話す	4	1.5%	助ける	1	0.4%
止める(とめる)	13	4.9%	警告	4	1.5%	止まる	1	0.4%
言う	13	4.9%	連れる	3	1.1%	止める(やめる)	1	0.4%
注意	10	3.8%	指摘	2	0.8%	禁止	1	0.4%
呼ぶ	9	3.4%	叫ぶ	2	0.8%	怒鳴る	1	0.4%
質問	7	2.6%	話し掛ける	2	0.8%	調査	1	0.4%
逮捕	6	2.3%	怒る	2	0.8%	責める	1	0.4%
捕まる	6	2.3%	尋問	1	0.4%	命令	1	0.4%
【直接発話】	5	1.9%	下りる	1	0.4%			

まず、SW2 場面における両者の使用表現を概観する。

母語話者の使用表現は主に【描写なし】、「呼び止める」、「注意」、「職務質問」に集中しており、ST2 場面と同じである。そのうち、最も多く使用されているのは【描写なし】と対象語の「呼び止める」であり、それぞれ 26%を占めている。それ以外にも 7 種類の表現が存在するが、ST2 場面よりは使用率が低い。

次に、CLJ の使用表現は合計で 32 種類あり、そのうち、【描写なし】となった CLJ は 117 人で、全体の 44.0%に達するが、ST2 場面よりは少ない。また、「聞く」、「叱る」、「止める（とめる）」、「言う」、「注意」、「呼ぶ」がある程度使用されているが、それ以外の表現を使った CLJ はわずかである。そして、対象語の「呼び止める」の使用例は見られなかった。したがって、I-JAS のサンプルから推測すると、全ての CLJ が「呼び止める」を使用することができず、SW2 場面においては「呼び止める」の非用が存在すると考えられる。

次に、SW2 場面における「呼び止める」の非用の実態を解明するため、母語話者に使用されず、CLJ に最も多く使用された代替表現の上位 3 語の「聞く」、「叱る」、「止める（とめる）」を分析する。

1) 「聞く」

「聞く」は SW2 場面で CLJ に最も多く使用された代替表現であり、9.0%を占めている。(16) のような使い方はよく見られるが、ST2 場面での「聞く」の使用実態と違い、(17) のような発話内容の直接引用に使用されたものが大幅に増えている。

(16) 色々な問題をきいている。

(JJC14-SW2-00060-K)

(17) お前、何をするんだと、聞きました。

(CCM27-SW2-00070-K)

2) 「叱る」

「叱る」の使用率は 6.4%である。これは ST2 場面と同じく、一部の CLJ は警官の表情などに着目し、「怒っている警官」として認識している可能性がある。

(18) でも、ある警官はこの事情を見ると、ケンさんは警官に泥棒として叱られた。

(CCM34-SW2-00040-K)

3) 「止める（とめる）」

「止める（とめる）」の使用率は 4.9%であり、ST2 場面より上昇している。

(19) しかし、それを見た警官さんがケンを止めました。

(CCT46-SW2-00040-K)

さらに、ST2 場面と同じく、漢語動詞がある程度 CLJ に使用されていることは、SW2 場面の 1 つの特徴として見ることができる。

表 25 CLJによる漢語動詞の使用の内訳 (N=266名)

使用表現	出現数	割合	使用表現	出現数	割合	使用表現	出現数	割合
注意	10	3.8%	警告	4	1.5%	禁止	1	0.4%
質問	7	2.6%	指摘	2	0.8%	調査	1	0.4%
逮捕	6	2.3%	尋問	1	0.4%	命令	1	0.4%

使用例 (20), (21) から見て, ST2 場面と同じくほとんどの場合において漢語動詞は「叱る」と「呼び止める」などの代替表現として使われているようである。さらに, (22) のような「逮捕」の使用例は ST2 場面より多い。

(20) でも, 通りかかった警官に見られて, 警告されました。

(CCT59-SW2-00050-K)

(21) その時, 警官がケンの行動を禁止しました。

(CCM14-SW2-00050-K)

(22) ケンが怪しい人にして, 逮捕しようでした。

(CCS12-SW2-00050-K)

5.2.2 SW2 場面における「呼び止める」の非用

ST2 場面と同様に, CLJ による「呼び止める」の使用頻度が 0 であるため, 実証分析のデータ要件を満たしておらず, ST2 場面に対するカイ 2 乗検定及びロジスティック回帰分析は行えない。

ST2 場面と同じように, SW2 場面における「呼び止める」の非用が存在すると推測できるが, ST2 場面より母語話者による「呼び止める」の使用率が上昇しているため, SW2 場面における「呼び止める」の非用はより高い程度で存在する可能性があると思われる。また, 習熟度, 教室環境, 出身地とは関係なく, 非用は CLJ 全員に存在していると考えられる。その原因は ST2 場面と同様であると判断される。

6. おわりに

本研究では『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』を用いた調査を用い, ミクロの視点で CLJ による複合動詞の非用を捉える試みを行った。「ピクニック」タスクにおいて犬が飛び出してくるストーリーテリング場面を「ST1 場面」, ストーリーライティング場面を「SW1 場面」と呼び, また, 「鍵」タスクにおいて, 警官に呼び止められる場面を同様に「ST2 場面」, 「SW2 場面」と呼び, 分析を行った。

まず, ST1 場面と SW1 場面において, CLJ による「飛び出す」の使用率が日本語母語話者より明らかに低いことがわかった。つまり, 会話でも作文でも, CLJ による「飛び出す」の非用が存在すると考えられる。また, カイ 2 乗検定を行った結果から, CLJ は ST1 場面において全体的に「飛び出す」の非用を起こす傾向があり, SW1 場面においても全体的に「飛び出す」の非用を起こす傾向が高いと判断された。非用の代替表現について, まず, 多くの CLJ は, 母語話者が使わない単純動詞を代替表現として使用していることが 1 つの重要な特徴として現れた。また, 対象場面の描写自体の回避と, 「飛び出す」以外の複合動詞

の使用も見られた。

次に、ST2 場面と SW2 場面において、母語話者の「呼び止める」の使用率は会話でも作文でもともに低かったものの、学習者ではほぼ全員が「呼び止める」を使用していないことがわかった。つまり、会話でも作文でも、CLJ による「飛び出す」の非用が存在すると考えられる。また、I-JAS のサンプルから、会話でも作文でも CLJ は全体的に「呼び止める」が使えない人が多い、つまり非用を起こしている人が多いと推測された。その原因は CLJ 全体的に未習得である可能性があるということが考えられた。非用の代替表現については、「飛び出す」の状況と同じく、多くの非用を起こしている CLJ が母語話者が使わない単純動詞を代替表現として使用している、ということが1つの重要な特徴として現れた。また、CLJ による【描写なし】の割合が高いことと、漢語動詞がある程度 CLJ に使われていることもわかった。

また、ST1 場面と SW1 場面にロジスティック回帰分析を行った結果、会話でも作文でも、CLJ の習熟度が上がるにつれ、「飛び出す」の非用が顕著に低下していることがわかった。また、会話では台湾 CLJ の「飛び出す」の非用は、中国大陸 CLJ の2倍になることがわかり、作文では2.7倍になった。さらに、「飛び出す」の非用において、教室環境については有意な差は認められなかったが、今後、JSL 学習者の習熟度を考慮した上でデータを増やして、より全面的なデータで分析することを提案した。

一方、実証分析のデータ要件を満たさなかったため、ST2 場面と SW2 場面に対するロジスティック回帰分析は行うことができなかった。しかし、「呼び止める」が CLJ のほぼ全員に使われていないため、「呼び止める」の非用は習熟度、教室環境、出身地とは関係なく、CLJ 全員の間に存在している、すなわち CLJ の全体的な未習得であると推測された。ここから、CLJ による複合動詞の学習と母語話者による複合動詞の使用の間に齟齬があることが示唆された。

以上の分析の結果、会話でも作文でも、特定の場面において CLJ は全体として対象語複合動詞使用の頻度が母語話者より少なく、代替表現として単純動詞を使う傾向があるという非用の実態を捉えることができた。また、複合動詞の非用は習熟度と出身地に影響されていることが1つの場面において検証された。このように、非用に着目した本研究は、学習者が習得すべき複合語を客観的に示すことができるため、複合動詞の習得研究の新たな研究方向を示唆することができた。

本論文では、I-JAS の特定の2つの場面に出現する「飛び出す」と「呼び止める」の2語について分析・考察したが、他の場面と他の語は扱っていない。ミクロな視点の考察であっても、語彙の非用の調査ではできる限り幅広く多数の対象語を扱うことが重要であると考えられる。また、I-JAS には JSL 学習者のデータが比較的少なく、その習熟度も相対的に低い。よって、教室環境は非用が生じる要因ではないとはまだ判断できない。今後は、各教室環境における JSL のデータを増やして分析する必要があることを提案する。さらに、日本国内自然習得における CLJ は人数が少なく、本研究は量的分析に基づいているため、自然習得の CLJ は対象外とした。今後は、日本国内自然習得も1つのタイプとして考察に入れることが望ましい。

付 記

本研究は、一橋大学大学院言語社会研究科に提出した修士論文の一部に加筆・修正を加えたものである。

文 献

- 高娟 (2018) 「作文コーパスにおける中国人学習者の日本語複合動詞の誤用分析」『日本語・日本文化研究』28, pp.64-71
- 迫田久美子・小西円・佐々木藍子・須賀和香子・細井陽子 (2016) 「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」『国語研プロジェクトレビュー』06 (03), pp.93-110
- 迫田久美子・石川慎一郎・李在鎬 (2020) 『日本語学習者コーパス I-JAS 入門—研究・教育にどう使うか—』くろしお出版
- 志賀里美 (2017) 『YNU 書き言葉コーパス』から見た複合動詞の使用実態—日本語母語話者と中国人学習者との比較—『恵泉女学園大学紀要』29, pp.69-91
- 陳曦 (2008) 『第二言語としての日本語複合動詞の習得—コーパスによる使用実態の調査を中心に—』中国社会科学出版社
- 陳迪 (2023) 「中国語を母語とする日本語学習者の発話における高頻度漢語動名詞の使用実態—『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』を用いた調査—」『統計数理研究所共同研究レポート』465, pp.1-22
- 姫野昌子 (2018) 『新版 複合動詞の構造と意味用法』研究社
- マリヤナヴォイニコヴァ (2017) 「日本語学習者による複合動詞の使用についての実証研究—母語話者・学習者コーパスによる調査をもとに—」『日本語・日本文化研究』27, pp.89-97
- 水谷信子 (1984) 「誤用分析 (1) @だれかがわたしの財布をとりました」『日本語学』03-04, pp.122-124
- 森田良行 (1994) 「動詞の複合における意味構成」『動詞の意味論的文法研究』明治書院

関連 URL

国立国語研究所言語資源開発センター 『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』 (I-JAS)
<https://www2.ninjal.ac.jp/jll/lsaj/ihome2.html>